

井上 浩* 日本産苔類ノート (7)**

Hiroshi INOUE*: Miscellaneous notes on Hepatics of Japan (7)**

33) *Mylia nuda* Inoue & Yang, *Taiwania* 12: 35, 1966.

Specimens examined. JAPAN; Isl. Yakushima, between Kosugidani and Hananogo, leg. S. Hattori nos. 7432, 7556, det. as *Mylia verrucosa* (TNS).
Distribution: Taiwan, Japan (new!).

台湾から記載した *Mylia nuda* (ナメリカタウロコゴケ, 新称) は *M. verrucosa* Lindb. に極めて類似した種類で、花被の性質が異なることで区別できる。台湾の高地の針葉樹林内にはわり合に普通に分布がみられるが、屋久島でもすでに服部博士が採集されているのがみつかった。

屋久島では *Mylia* 属は堀川 (*Journ. Sci. Hiroshima Univ. S. B.*, 2, 2: 164, 1934) および服部 (*東京科博研報* 11: 36, 1948) によって *M. verrucosa* だけが記録されているが、上記 *M. nuda* と共に *M. taylori* (Hook.) Gray もある (小杉谷～花ノ江川, 服部新佐 no. 7440, TNS)。 *M. verrucosa* は北日本に多い種類で、四国、九州でもやや高い所に多く、南限は屋久島である。 *M. nuda* の染色体は $n=9=H+4V+3J+j$ で (井上, *Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo* 11: 397, 1968), *M. verrucosa* と変らないが、 *M. verrucosa* の分布南限附近でこれから分化したものと推定できる。台湾では *M. verrucosa* はすべて *M. nuda* におきかわっている。

34) *Calypogeia sphagnicola* (Arn. & Perss.) Warnst. & Loeske, *Verh. Bot. Ver. Brandenburg* 47: 320, 1905.

Specimens examined. JAPAN; Nakasato-cho, Tsugaru-gun, Aomori Pref., in *Sphagnum* moor, leg. A. Miyawaki no. 11 (TNS); Mt. Daisetsu, Hokkaido, in *Sphagnum* moor, leg. D. Shimizu s.n. (TNS). Distribution: Europe, northern N. America, Japan (new!).

この *Calypogeia sphagnicola* (ミズホラゴケモドキ, 新称) は北米ではアラスカまで分布が知られていて、日本の北部のミズゴケ湿原にも予期されてよいものであった。横浜国立大学の宮脇昭博士の生態調査で青森県からみづかり、かつて清水大典氏が北海道大雪山で採集された資料がある。

最近でた R.M. Schuster の *Hepaticae and Anthocerotae of N. America* (1969)

* 国立科学博物館. Division of Cryptogams, National Science Museum, Tokyo.

** 植研 44(10): 300~303 (1969) よりつづく。

には本種の美しい図が出ている。同書中に “Recently found in Hokkaido, Japan (Inoue, pers. comm.)” とあるのは上記の北海道の資料に基づくものである。北海道ではもっと方々のミズゴケ湿原に生育がみつかると思われる。

35) *Plagiochilium oppositus* (Reinw., Bl. & Nees) Hatt., *Biosphaera* 1: 7 (1947).

Specimens examined. JAPAN; Isl. Hachijo, summit area of Mt. Hachijo-Fuji, leg. S. Kurokawa nos. 1350, 1358 (TNS). Distribution: Subtropical and tropical Asia to New Guinea.

The present report is reconfirmation of the occurrence of *Plagiochilium oppositus* in Japan; this species was once rejected from Japan (c.f. Inoue, *Journ. Hattori Bot. Lab.* 20: 102, 1958; as *Noguchia opposita*).

日本から *Plagiochilium oppositus* は南九州と伊豆の八丈島から記録されていたが、南九州のものは *Pl. theriotanus* (St.) Inoue であることが確認された。八丈島のものは堀川博士 (植研 12: 667, 1936) が一度記録されたが、この報告は確認できず、日本産のものから除外されて来た。最近、黒川道氏が八丈富士の頂上附近の原生林の樹幹着生のコケ類を多量に持帰られたが、この中に本種が混生しているのが確認でき、改めて日本産コケ類に追加できることとなった。

36) *Cylindrocolea recurvifolia* (Steph.) Inoue, comb. nov.

Basionym: *Cephalozia recurvifolia* Steph., *Spec. Hepat.* 3: 327 (1908).

Synonym: *Cephaloziella recurvifolia* (Steph.) Hatt., *Bull. Tokyo Sci. Mus.* 11: 28 (1944) = *Acolea formosae* Steph., *Spec. Hepat.* 6: 78 (1917) = *Gymnomitrium formosae* (Steph.) Horik., *Journ. Sci. Hiroshima Univ. ser. B, div. 2,* 2: 141 (1934), syn. nov.

Specimens examined. JAPAN: Isl. Yakushima, leg. Faurie no. 707, type of *Cephalozia recurvifolia* (G). TAIWAN: without definite loc., leg. Faurie no. 15 (G). KOREA: Mt. Pukhan near Seoul, leg. W.S. Hong no. 6979 (TNS). Distribution: Japan, Korea and Taiwan.

As already pointed out by Kitagawa (*Acta Phytotax. Geobot.* 21: 114, 1965; in Japanese), *Cephaloziella recurvifolia* was very heterogeneous element in the genus *Cephaloziella* in (1) the wide, slightly oblique insertion line, not extending to the dorsal stem-midline, (2) the paroicous inflorescence, and (3) the long, cylindrical (when sporophyte formed) or plicate perianth, with truncate mouth. These features are of *Cylindrocolea* recently segregated from the *Alobiella* complex by Schuster (*Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo* 12: 666, 1969).

ツクシヤバネゴケ *Cephaloziella recurvifolia* とされて来た植物は *Cephaloziella* 属の概念からいちじるしく逸脱しており、北川博士もすでにこのことをいくつかの形質をもとにして指摘している (植物分類地理 21: 114, 1965)。北川博士はこの種をもとに新属を設定することが可能だとしながらも、胞子体未知のためひかえられた。最近、R.M. Schuster (国立科博研報 12: 666, 1969) が *Alobiella* 属の検討をおこなった際、副産物として設立した *Cylindrocolea* はまさしく本種を含む一群をさしているものである。*Cylindrocolea* にはアフリカおよびマダガスカル産の 2 種が含まれ、他にまだ 10 種程度があるようである。日本および周辺地域の *C. recurvifolia* は花被が深い褶をもつことが多いが、胞子体ができると、この褶は弱まり、上部 1/4 ぐらいのところだけに褶が残る。胞子体の構造は *Cephaloziella* などと大差はない。

37) ***Plagiochila arbuscula*** (Brid.) Lehm. et Lindenbg. in Lindenbg., Spec. Hepat. 23 (1840).

Basionym: *Jungermannia arbuscula* Brid. in Lehm., Nov. Min. Cogn. Stirp. Pug. IV, 63 (1832).

Synonym: *Plagiochila belangeriana* Lindenbg., Spec. Hepat. 109 (1842). *Plagiochila yuwandakensis* Horik., Bot. Mag. Tokyo 49: 50 (1935). = *P. yuwandakensis* f. *grossedentata* Hatt., Bull. Tokyo Sci. Mus. 11: 65 (1944). = *P. yuwandakensis* var. *grossedentata* (Hatt.) Hatt., Journ. Hattori Bot. Lab. 3: 32 (1950). = *P. belangeriana* var. *yuwandakensis* (Horik.) Inoue, Journ. Hattori Bot. Lab. 20: 71 (1958), syn. nov.

Distribution: Southern Japan, Taiwan, Indonesia, Micronesia.

As discussed in Inoue and Schuster (Journ. Hattori Bot. Lab. 34: 165, 1971), the correct name for "*Plagiochila belangeriana*" should be *P. arbuscula* (Brid.) Lehm. et Lindenbg.

東南アジア熱帯から南九州まで広く分布している "*Plagiochila belangeriana*" という種類の学名は命名規約上用いることができなくなり、代りに *P. arbuscula* を用いるべきである。このことはすでに New Zealand のハネゴケ科を取扱った時に指摘しておいた (服部植研報 34: 165)。南九州から奄美大島にかけてのものは var. *yuwandakensis* として区別したが、東南アジアの資料を多数調べていると、この区別は意味がないことが判った。

38) ***Frullania kamimurae*** Inoue, Journ. Jap. Bot. 41: 15 (1966).

Synonym: *Frullania pendula* (non Mitt., 1861) Kamimura, Acta Phytotax. Geobot. 14: 108 (1952). = *Frullania akisawai* Kamimura, Bull. Kochi Gakuen Junior Coll. 2: 24 (1970), syn. nov.

上村登博士の記載された "*Frullania pendula*" という学名には先行名があるので

F. kamimurae と新名をつけておいたが、最近になって上村博士も *F. akisawai* という新名をつけられた。同じものである。

○附子に関する民族植物学的の一考察 (藤田安二) Yasuji FUJITA: An ethno-botanical consideration on the poisonous aconite "Fusi" (Futsz)

本草に言う附子は有毒な根を有する *Aconitum* の一種で、*A. Fischeri* Reichb.¹⁾ あるいは *A. chinense* Sieb.²⁾ とされていたが、*A. Carmichaeli* Debx.³⁾ であることがほぼ確実となった。

李時珍は烏頭に附して生じるものを附子とし、あるいは冬に採ったものを附子、春に採ったものを烏頭と言うとも言われ、また一歳のもを側子、二歳のもを烏喙、三歳のもを附子、四歳のもを烏頭、五歳のもを天雄と言うとも言われる。附子、烏頭、天雄等はすでに神農本草経に出て、また上記の説は太平御覧等にも出ている。

しかし附子とは烏頭に附いて生じるから附子と言うのではなく、こう言う考え方は誤りで、その名称の真の起源は確かに別にある。そしてこの附子がもととなって烏頭、烏喙、天雄、側子などと言う根部の種類を示す名前が生れたのである。これは植物名実図考などの記事を見ても容易に想像がつく。

Aconite をインドにては Hindi で bis, bish と言い、これは Sanskrit の visha, viṣa から来、visha とは poison を意味する⁴⁾。中国の附子はこの bis, visha などに対する同音の宛字であり、これはその利用がインドから中国へ伝わったためと思われ、Nepal, Assam 方面から雲南、四川方面の原住民を媒介として⁵⁾、矢毒としてまず伝播されたものにちがいない。

今インドその他の *Aconite* の土名のうち bis, bish 系のものを示せば次のようである。アラビアの bis はもちろん Hindi の bis が伝ったものである。

まず最も多く矢毒に用いられる *A. ferox* Wall. を Arabia にては bish; Assam にては bish, Bengali にては bish; Hindi にては bis, bish; Nepal にては bikh, bish または bishnak; Persia にては bishnag; Sanskrit にては visha; Dravida 系の Tamil 語では vashnavi; 同じく Telugu 語では atavasa, vasanabhi などと言う⁶⁾。

つぎに *A. luridum* Hook. f. を Bengali にては bish, butsnabbish; Nepal にては bikh, bish あるいは bishnak; Telugu にては ativassa と言う⁷⁾。

また *A. heterophyllum* Wall. を Bombay では atvika; Gujerati では ativish; Hindi では ativika; Marathi では atavish; Sanskrit では visha, visharupa, upvisha, ativisha, vishva などと言い、Telugu では ativisa と呼ぶ⁸⁾。

中国近代の附子の音 futsz, futzŭ, fu-tse, fuzi 等は bis にはやや遠いが、呉音によって中国より伝わったわが国の呼称 busi は bis, visha に甚だ近い。